

宮原昭夫

石のニンフ達

石のニシフ達

昭和四十四年二月二十五日 第一刷

定価五百六十円

著者 みや ほん あき お 宮原 昭夫

発行者 桜原 雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
TEL (東京) 三三—三三
郵便番号 一〇二

印刷所 大日本印刷
製本所 加藤製本

※万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします

石のニンフ達

宮原昭夫

文藝春秋刊

装
幀
駒
井
哲
郎

石のニンフ達

亡き小山清さんに捧げます

石のニンフ達

始業時間に遅れそうな高校生のみさをは、さっきから横断歩道を渡れないでやきもきしている。……やっと横断歩道を渡り、商店街を縦断して、向こう側の台地の斜面を長々とはすかいに這いのぼる坂を歩いて行くうちに、みさをの胸は、あながち運動のせいばかりでなく、異様にトキトキと鼓動を速めてくる。

通勤の男女が次々に向こうから下りて来、そしてみさをと同じような女高生達が続々こっちら上がつて行く、この長い長い坂道を歩いているうちに、いつもみさをは、漫画映画などで、森の小道を歩いている少女が、次第に魔法使いの老婆の本性を露わしてくるように、自分が、いつのまにか別のものに姿を変え始めるような気がするのだ。なんだか油汗が出て来て、今にも倒れそうな緊張と興奮が、学校に近付くにつれて、潮がひたひた寄せるように高まってくる。

校門の石柱の左右いくばくかの間、しょうしゃな金属柵が伸び、その先から、ちょうど生徒の背丈ほどのコンクリート塀がぐりと学校全体を取り巻いている。その内部は、運動場も隅から隅までタールで舗装してある。校門から昇降口までは石だたみだし、裏庭はすべてコンクリートで固めてある。

（みさをは、或る放課後、ふと思い立って、校内を巡ってみた事がある。いったいこの学校には土があるのだろうか。校内くまなく回ったあげく、みさをは最後に土をみつけた。用務員室の窓に、ビールの木箱が置かれ、その中に赤茶けた土が、惜しそうな感じに半分ばかり入っていた。そこから三本、草花の苗が伸びていたが、都会生まれのみさをははその名前は判らないのだ。）

この学校の周辺には、あまり高い建物はないが、一つだけずば抜けているのは、西隣の民間テレビの鉄塔だ。こんな晴れた朝には、全部の骨組みを銀色にキラキラさせて、まるで青空からみさをに向かってのしかかって来るようだ。そして下校時になると、西日を背に、黒々としたシルエットを空一ぱいに浮かび上がらせ、時が経ると、地上に大きく印されたその鋭い影が、コンクリート塀をまたぎ越して次第に校庭に突き刺さって来て、ついに敷地全体を刺し貫くと、やがて夕暮れが来て、鉄骨のシルエットの間に夕焼けが燃える。

……校門に入って、昇降口までの石だたみを歩いて行く途中で、みさをはが、ふと気付いてみる

と、家を出る時持っていた緑色の革鞆を持っていないのだ。みさをは、石だたみの上に立ち止まって、しばらく考えている。

みさをは、どうしても、自分の腕から、その鞆の重みが消え失せた瞬間の記憶がない。みさをは徒歩通学だから、乗り物に置き忘れるはずはない。

しばらく考えてから、みさをは仕方なく、元来た道を引き返し始める。だいぶしばらくもどると、人通りの少ない建売住宅の間の、石炭殻を敷きつめた路地の真中に、ふくれ上がった緑色の鞆が、握りを上にしたまま、でんと鎮座していた。みさをはやっくらさと持ち上げて、又学校へとって返す。

けれども、こうした上の空さ加減は、このせつ、あながちみさをに限った事ではないのだ。同級生の糸子の恰好がどうも腑におちないので、周りの者が調べさせると、普段着のスカートを脱ぐのを忘れて、その上に制服のスカートをはいて来ていたりするのだ。

一

とにかくそんな、どこか熱病じみたものがみさをのクラスにはびこりだしたのは、なにがきっかけだったのだろう。なににせよ、それには、あの空気が大いに関係しているのだけは間違いない

いだろう。

清潔なコンクリート壁と、広いガラス窓に囲まれた明るい教室内には、半日も経つと、何とも言えない生臭い空気がたちこめてくる。それは、室内に詰め込まれた女高生達の臭いのだが、とくに、梅雨どきの雨もよいの昼食時などにはそれがひとしおだ。

そういう空気の中では、どんなささいな物事でもみるみる大入道のように増幅されるのだ。

たとえば、せんだつでも、クラスの中に些細な盗難が頻発し始め、体育のあと、ロッカーから一人の生徒のセーラー服の小豆色のネックチーフが紛失していたり、或る少女の筆箱から鉛筆が全部なくなっていて、万年筆だけ残っていたり、それがどうしても外部の者のしわざとは思えないので、教室内は、いたちに襲われた鶏小屋のような騒ぎになった。それぞれが、自分の机の中や衣類の中をなまっ白い手が探り回っているところを想像して、裸身をなで回されたような生理感覚に、卒倒しそうになってしまうのだ。

一人が、よろめくような足取りで、級友達のもとへ駆けつけて、私の生理用品が盗まれた、と息も絶え絶えにささやいて、ところが家へ帰ってみたら置き忘れてあって、それをどうしても人に打ち明けられず、悩み多い毎日を送ってしまったりするのだ。

盗難が十数回くりかえされ、教室は、ふくらし過ぎた風船か、過熱した火薬庫みたいな様相

を呈してきた。

昼休みの間中、机に突っ伏して身動きもしなかったみさをが、突然、ガバとはね起きて、まるで外のものが何一つ目に入らないように眼を据えて真一文字にフサエの席へ歩いて行き、うわずった声で、あたしのヘアバンドを返してちょうだい、と叫ぶ。たちまちいんとなってしまった教室で、フサエは、読んでいた小説から目を上げ、のろのろ周りを見まわす。

「さっき、誰もいないこのお部屋に、こっそり入ってくるの見ちゃったわ。見ちゃったんですもん」と、みさをは、わなわな震えだし、悲鳴のように叫び続ける。

フサエは黙ったまま、目の前の空間をぼんやり見ている。フサエは抜けるように色が白く、おかげでその水瓶のように太ったふくらはぎのあたりなど、とかげのような触感を思わせる。度の強い眼鏡と、ぼってりした唇。

「かえしてちょうだい。あなたでしょう。知ってるんだから」

みさをは、けたたましく、胸の前で握りしめた両手を何度も前に突き出すようにして叫びたてる。

フサエは、うっそりした笑いを浮かべ、

「そう……、そう思ってたんですけども、かまわないわ」と、のろのろ言う。そして深海魚のよ

うな笑顔のまま、黙りこんでしまう。

みさを始め、みんなは、なんだかぎくりとし、不気味な生き物を見たようなおびえにとりつかれて、黙ってしまふ。

ところが、それから一週間ほどして、同級生の糸子が、朝、登校したその足で、校長室を訪れ、いきなり自分の盗みを克明に告白し始める。そして、そうやって女校長の前で泣き崩れるために盗んだのではあるまいかと疑われるほど満足気に、せい一ぱい泣き崩れる。

盗難品はすべて、教師を通して持ち主に返される。「二人のつみびとが、ここにめでたく救われました。みなさんも、ともに喜びを分かち合い、天のお父さまに感謝を捧げましょうね」などという言葉と共に。

ヘアバンドを返されたみさを始め、クラスの皆は、あらためて返されてみると、盗られた品物はどれもこれも、ほとんど無料同様のものばかりで、こんな事がなければ、捨ててしまったかも知れない事に、はじめて気がつくのだ。血も凍るようなスリラー映画のクライマックスに電燈が点いてしまつて、薄よごれたスクリーンがむき出しになったような感じだ。

そして、当の糸子は、悔悟の演技を強調し過ぎた、変にほがらかみたいな物腰で、皆に気詰まりな思いをさせ続けるのだ。

一方、皆は、あれ以来ずっと、なにごともなかったように、例の粘液質の表情と、自足したのろろした物腰で過ごし続けて来たフサエに、突然、吐き氣がするほど驚いてしまう。たとえ、フサエが一人で自分の席で「さらば、さらば、さらばふるさと」などと小声で歌い出したりすると、それだけの事にクラス全員が何だかひどくびっくりして、しいんとしてしまうのだ。

朝みさをに、別のクラスの生徒が、フサエから託されたといって手紙を渡す。

胸さわぎで指をもつれさせながら、みさをが開いてみると、鉛筆の走り書きで、

「……わたしは疲れきってしまいました。わたしは生きて行こうとして、あらんかぎりの力を使い果たしてしまいました。私には、生きる事は、無理すぎる大事業なのです。もう、休みたいです。」

このお手紙を貴女がお読みになつてゐる頃には、私は深山みずまのふところ深く分け入りつつあると御承知下さい。思えばわたしの短い生涯に……」云々という文面なのだ。

みさをは、たちまちわくわく震えだし、どうしたらいいんだろう、とりかえしがつかない事をしてしまった、あたしも死ぬわ、などと思ひ乱れて、しまいは自分が何を考へてゐるんだか判らなくなつてしまつて、魂が抜けたように、拡げた教科書のうしろで蒼白になつて震えているう

ちに一時間目が始まり、やがて終わり、休み時間になったら、フサエが、甲斐甲斐しく鞆のほか
に手提げもぶら下げて、鼻の頭にうっすら汗をかいて、せつせと登校して来た。歯医者へ寄って
来たというのだ。

みさをは、フサエがせめてその日一日なりと休むならともかく、たった一時間遅刻しただけだ
った事になによりもショックを受け、クラス中が啞然とするくらいの大声で泣き出してしまふ。

どんな世界にも、水たまりからぼうぶらが湧くように、必ずヒロインが生み出される。そして、
そんな際、いわば人身御供になるのは、決まって、かなり見栄坊で、しかも、サービス精神の過
剰な人物なのだ。

それは例えば、修学旅行などになると、

「あたし、場所が変わると、食欲も無くなるし、一睡も出来なくなるの」などと、なにか自慢ら
しく言い出し、そして、その自分の言葉に自分でとらわれてしまって、死ぬ程の空腹や睡魔と頑
強に闘い続け、ついに最後まで意地を張り通したりするような、意味のないストイシズムの持ち
主にきまっているのだ。

糸子は、かなり整った顔立ちをしているが、つるんとした無表情で、そのくせなにかと言うと、

そのちんまりした口の中に存在しているとは思えないほど長いピンク色の舌でゆっくり野放図に舌なめずりをするのだ。その無表情と舌なめずりとが、糸子をコリーそっくりに見せる時がある。脂肪らしいものがどこにも付いていないひよろ長い身体つきで、ひどいなで肩なので、セーラー服の裕い襟元が次第次第に片方へ寄って行って、ふと気がつくと、痩せた裸の肩が一つ襟元からとび出ていたりする。

そういえば、糸子に限らず、この年頃は、みんな何処かアンバランスな身体つきをしている。腕が、なにか膝頭にとどきそうなくらい長かったり、顔の中で鼻ばかり急に成長したり、そうかと思うと頸筋がむやみやたらに長い子や、下半身だけ分厚く発達して、上半身とは別人のような子がいたりする。あと何年かすれば、それぞれ、それなりに釣合いがとれて来るのだが。

たとえば、糸子が突然とんきょうな声を上げ、

「ほら、みてよ、みんな。まるつきりわらじみたい」

などと自分の弁当箱をみんなにさしつける。ほんとに、小判型の弁当箱の御飯の上一ぱいに、まるごとのコロッケが一つ載っているとこは、履き捨てたわらじにそっくりだ。けれど、そんな何でもない事が、級友達には予想外のショックになってしまうのだ。

もともと弁当の時間というものは、少女達は訳の判らない羞恥をおぼえ、それぞれ自分の弁当